

【実践の記録】

社会科の授業とモノ

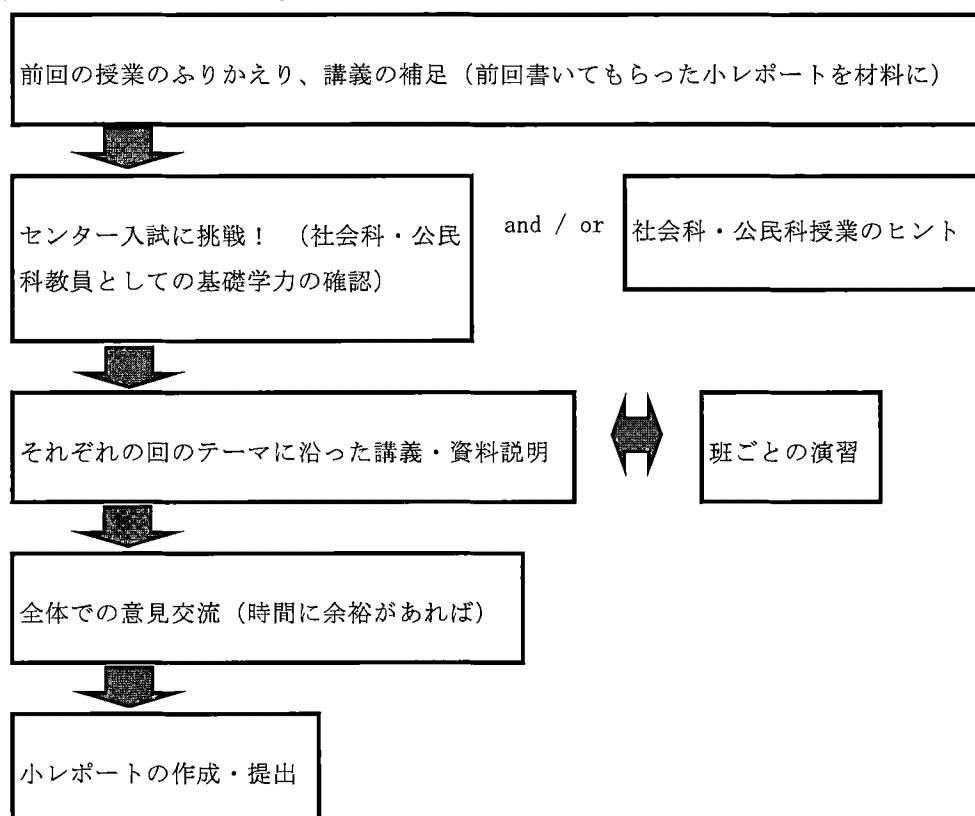
熊 田 亘

明治大学で「社会科・公民科教育法」を担当させていただいている。

本稿では、「社会科・公民科教育法」の授業で紹介している、中学校・高校の授業で使えるモノ（実物教材）について書く。

1 「社会科・公民科教育法」の授業の流れ

「社会科・公民科教育法」の授業全体は、Ⅰ（春学期）もⅡ（秋学期）も同じく、おおむね以下の流れで行っている。



「モノ（実物教材）の紹介」は、上図の「社会科・公民科授業のヒント」の部分で行う。したがって、時間的には、せいぜい5分から10分の取り組みである。「社会科・公民科教育法」の授業をフルコースの料理にたとえれば、オードブルかスープにあたる部分と言えよう。

加えて、春・秋両学期とも、受講生に模擬授業をしてもらう後半は、時間が足りず「モノの紹介」は行わないので、1年間を通じてモノを紹介できるのは16回ぐらい、せいぜい合計50種類程度である。

2 社会科（「社会科・公民科教育法」）の授業にモノを持ち込む意味

社会科の授業に、モノ（実物教材）を持ち込むことについて、私は次のふたつの意味があると考えている。

第一は教育内容（何を教えるか）に関連する。

社会科や公民科、特に私が日常的に高校で教えている「政治・経済」の教育内容は、高度に抽象的である。そこで、生徒は、主権、自由、市場機構、金融、南北問題等、社会科学の概念やモデルを学んでいく。

かつて内田義彦は、社会科学は（自然科学での顕微鏡や望遠鏡の代わりに）「概念装置」というメガネを用いて社会を見るのだと述べた（『読書と社会科学』（岩波書店1985））。社会科公民科の授業で概念を学ばせることは欠かせない。

ただ、そこで問題なのは、抽象的な概念やモデルをそれだけで教えていくと、中学生・高校生は、それを呪文のように覚えるだけで、概念やモデルと、具体的な事物や現象を結びつけようとしない、あるいはできないことがしばしば起こるということである。

たとえば、契約という概念を学んでいても、「この2〜3日に契約を結んだ人？」と尋ねたとき、自分がコンビニでジュースを買ったことが売買契約に、友だちからマンガを借りたことが使用貸借契約にあたると思い至らなかったり、「ペティ・クラークの法則によれば、経済発展に伴い（ ）産業のウェイトは低くなっていく」という文の（ ）に「第一次」という言葉は入れられるのに、第一次産業とは具体的にどういう産業か説明できなかったりといったことがある。

そこで、「社会科・公民科教育法」の受講生には「社会科の授業では、具体と抽象を往復させることが大事」「生活と科学を結びつけると言ってもいい」と繰り返し言う。具体的なイメージと社会科学の抽象的な概念のつながりを常に意識させていきたいのである。

30年以上前になるが、鶴見良行『バナナと日本人』（岩波書店1982）という本が社会科教員の間で評判を呼んだ。バナナというありふれた果物を出発点に、日本とフィリピンの関係、フィリピン国内での土地所有制度、先進国の巨大農業関連会社と途上国の農業労働者の関係等を解き明かしていく書である。社会科の授業はこの本のようなものでありたいと当時強く思った。

スローガン的に言えば「見えるモノから見えない仕組みへ」といったところだろう。

そういう思いもあって、「政経」の授業に、そして「社会科・公民科教育法」の授業にモノを持ち込む。

第二は教育方法（どのように教えるか）に関連する。と言っても、そんな大層な話ではない。

かつて、私がモノについての蘊蓄を語っていたら、他の社会科教員に「授業でモノを見せるのは『一発芸』的じゃない？（だから私は好まない）」という趣旨のことを言われたことがある。まったくその通りと肯きつつ、同時に私が考えたのは、「たぶんこの人は、生徒を授業に集中させることに苦勞するような学校にいたことがなかったのだらうな」ということだった。

「社会科・公民科教育法」の受講生の被教育体験を聞いても、彼ら自身はもちろん、学校全体としても授業は落ち着いていて、生徒はおおむね真面目に授業を受けていたようである。けれど、受講生が教員になったとき、そういう学校に赴任するとは限らない。

私は、教員になって20年近く、埼玉県立高校2校で教えていた。2校とも、残念ながら、勉強が好きとは言いがたい生徒が多数を占める学校だった。大学・短大への進学率は卒業生の2割程度だったから、「入試に出るぞ」をインセンティブにすることもできなかったし、「赤点にするぞ」というオドシもあまり効かない。

それゆえ一私の授業が下手だったということなのだが一生徒は授業中アッと言う間に寝てしまったし、そうでなくても授業を受けること＝黒板を写すことと心得て、あとは下を向いていることも少なくなかった。

授業中にバタバタと生徒が「討ち死」して机に突っ伏していくのを見るのはつらい。プライドが傷つく。

そういう生徒たちに、一瞬でもいいから授業に目を向けさせたい、授業内容に関心を持たせたい、顔を上げさせたいという極めてささやかな願いが、そもそも私が授業でモノを見せ始めた出発点である。

たとえば、「生命倫理」に関する授業で脳死と植物状態の違いを説明するとき。脳死の人の脳波の記録用紙と、植物状態の人のそれを持ち込み、ついでに「これは私の脳波、一応、正常人」と私の脳波の記録を見せたときに、1年間ほぼずっとうつ伏せていた生徒がむっくり顔を起こすということがあったりして一たとえそれが終わるとまたうつ伏せてしまうとしても—1年間寝っぱなしよりはマシと思って授業をやってきた訳だ。

要するに授業でのモノの紹介には

- ① 概念やモデルへのいざない
- ② 授業そのものへのいざない

のふたつの意味があるということだ。

それに加えて、「社会科・公民科教育法」の受講生、つまり教員の卵にこれらのモノを紹介

することには第三の意味があることに気づいた。

それは、授業づくりや教材探しのためにアンテナを張り巡らせることの重要性を分かってもらうということである。

モノを紹介するときには、それをどのように入手したかも話す。「新聞で紹介記事を読んでamazonで注文した」「これは博物館のミュージアム・グッズ」「店頭で見つけて飛びついた」「ヤフー・オークションで競り勝った」等である。ちなみに私は、AKB48の高橋みなみ・横山由依・板野友美が一役買った東京都知事選の特大大スターをもらうために都庁まで足を運んだことがある（もちろん教材に使おうとしてである）。

こういう話を何度か繰り返すうちに、受講生から
「どこにでも教材は転がっているんだ」
「教材を発見できる目を育てないといけないと思った」
「森羅万象、教材ですね」
というような感想が出てくる。

3 2016年度の「社会科・公民科教育法」で紹介したモノから

以下、2016年度の授業で紹介したモノのうちのいくつかを示しておく。なお、授業中の教員の言葉は『』で表している。

(1) タイ製のニット帽、ペルー製の笛

ニット帽をかぶり、笛を吹いてみせ、
『帽子と笛、このふたつに共通するものは何だと思う？』
と尋ねる。これだけでは答は出ない。だが、
『帽子はタイ製、笛はペルーのものです』『経済の授業に関係があります』『南北問題』『途上国支援』

とヒントを重ねていくと、どこかの時点で
「フェアトレード？」
という声が挙がる。
その通り、このふたつはフェアトレード製品として輸入されていたものなのである。
そこで、そこからフェアトレードについて簡単に説明していく。フェアトレードで購入した黒砂糖とかチョコレートとかを受講生に食べてもらったこともある。

(2) ネクタイとループタイ

『生徒は、教員の様子を見ていないようでホントによく見てるんだよね。床屋さんに行けば翌

日に「先生、さっぱりしましたね」と声を掛けてくるし、私は普通スーツを着ているのだけど、学校行事の時とかにジーンズで行くと「今日は私服ですね」と言われたりする。

ネクタイや携帯・スマホのストラップも観察されていたりします。「動物柄のネクタイ、お好きですね」と言われたこともあります。だから、身だしなみには注意した方がいいし、そういった話題から生徒とのコミュニケーションをとるのもひとつのワザ』

と受講生に話す。そのうえであらかじめ締めていたネクタイを掲げる。

『今日のネクタイは何のネクタイだか分かる？』

そこにプリントされている、逆S字の鉄条網と、火を灯したロウソクの図を板書して、『鉄条網は圧政や弾圧をイメージするでしょう。ロウソクの火はそれに対抗している。そういう、人権擁護の活動をしている国際的な団体を知らない？』

と尋ねる。それでも出てこない場合が多いが、時に「アムネスティ？」という声が聞こえる。

「政経」の教科書では、「人権の国際化」の節で、国際的な人権 NGO の代表的組織としてアムネスティ・インターナショナルが紹介されていたりするので、アムネスティ・インターナショナルがどのような活動をしているのかもかいつまんで話す。

この時に、ついでに紹介するのは「竹島ループタイ」。隠岐産の黒曜石に、「竹島 島根県隠岐」と彫り込まれた金具がついている。こちらは日本の抱える領土問題について話す際に使えそう。本当は、竹島を訪問して、韓国の主張に基づくモノを購入したいのだがなかなか実現できない。

(3) 1 オンス金貨

第二次世界大戦後の国際経済体制を話す時に必ず登場するのが「金 1 オンス＝35 ドル」という金・ドル交換レートである。

『教科書に金 1 オンス 35 ドルって書いてあるけど、1 オンスってどれくらいか分かる？ 分からないでしょう。ということで、1 オンス金貨を持ってきました』

と言って、1 オンス金貨（オーストリア造幣局製造のウィーン金貨）を見せる。

金は比重が大きいので（19.32、ちなみに鉄は 7.874、鉛でも 11.34）、1 オンス金貨も大きくくはないが持ち重りする。回覧して、そのズッシリした感触を味わってもらう。むろん貨幣価値が今とは違いますが、それにしても、たとえば 10 ドル紙幣 3 枚＋5 ドル紙幣 1 枚とこの金貨との交換を保証できたということから、当時のアメリカの経済力の強さが実感できそう。

『1970 年代まで続いた固定為替相場制だと、1 ドル＝360 円だから、35×360 で 12600 円。では、この金貨、今いくらぐらいだと思う？』

これでだいたい 16 万円（2017 年 1 月始め）』

と言うと驚きの声があがる。

『ついでながら、私がこれを購入したのは約 10 年前だけど、その時は 7 万 5 千円ぐらい。10 年で 2 倍以上っていい投資ですよ。教材探しは財テクにもなるかも』

と言うと受講生も笑う。

(4) ODA と紙幣・貨幣

通貨（紙幣や貨幣）はそれぞれの国の歴史や文化をよく示していて社会科・公民科の教材として使えるものが多い。インドが多民族・多言語の国家であることを説明するときに、インド紙幣（額面が 17 種類の公用語で表示されている）を使うなどはその例である。

カンボジアの 500 リエル紙幣、バングラディシュの 100 タカ紙幣、ラオスの 10000 キープ紙幣を見せて、共通点を尋ねてみる。

「アジアの国」「発展途上国」

という答は返ってくる。

紙幣の裏面を拡大すると、3 枚とも橋が図案化されていることが分かる。そこでヒント。

『途上国＋橋、それに日本が関係している、と言えば？』

「経済援助」「ODA（政府開発援助）」

と答が出れば優秀である。

たとえば 100 タカ紙幣について、外務省ウェブサイトには次のように説明がある。

「絵柄にもなっているジャムナ橋は、鉄道、ガスパイプライン、送電線などの設備も備えた多目的橋であり、日本が円借款（平成 5 年度、総額 215.62 億円）で協力したものです。」

500 リエル紙幣の絵柄（メコン河にかかる「きずな橋」）、10000 キープ紙幣の絵柄（メコン河にかかるパクセー橋）についても同様の説明がある。

バングラディシュの 2 タカ貨幣も見せた。これは、バングラディシュの中央銀行から受注して、日本の造幣局が製造したもの。

そこから、ODA によるインフラ整備というと、橋や港湾、道路などが思い浮かぶが、ソフト面のインフラ、たとえば警察・裁判所など司法制度の整備や、市場や中央銀行など経済・財政制度の整備も重要だという話をする。

(5) インフレ紙幣

近年の日本でインフレは「目標」になってしまっているが、歴史的にみれば、通貨の歴史はインフレとの闘いの歴史だったと言っても過言ではない。インフレーションのすさまじさについても実物を見せてやりたい。

『インフレーションは分かりますか。ひとつの物の値段が上がるのではなくて、物価が、つまり、色々な物の値段が全体として持続的に上がっていくことですね。今まで、1 ヶ月 20 万円で

暮らしていたのが、同じ暮らしなのに 25 万円かかるようになったとか、そういう感じ。

物価が上がるということは、通貨の価値が下がるということなので、ひどいインフレの場合、通貨を再発行する必要が出たりもするわけです』

と言って、第 1 次世界大戦後のドイツの紙幣数種を見せる。

『こちらは世界史上有名なドイツのインフレ紙幣です。「世界史」の教科書に、第 1 次世界大戦後のドイツで起こったひどいインフレに関する写真が載っていたのを覚えている人もいるでしょう。乳母車に札束を山盛りにして運んでいる写真とか。その頃の紙幣です。』

そもそもサイズやデザインに統一がとれていないし、裏に何も印刷されていなかったり、1000 マルク紙幣の上に、赤字で 10 億マルク (!) と印刷されていたり、当時の混乱が窺える。

『こちらは近年のもの。アフリカのジンバブエで、2000 年代の後半に経済的破綻が生じた時期に発行された紙幣です。』

1 (ジンバブエ) ドル、2 億ドル、10 兆ドル、20 兆ドル、50 兆ドル、100 兆ドルの紙幣を順に見せていく。例年、受講生に人気の高い (?) モノである。

(6) 国旗など

国家のシンボルである国旗もまた、国家という「見えない」ものを可視化するのに使える。

授業で見せるのであれば、卓上に置くような小さなものではなく、掲揚用の大きなものの方がインパクトがある。

アメリカ国旗 (星条旗) を用いて 13 植民地や現在の州の話からアメリカの歴史や、連邦制であることを説明できるだろうし、イギリス国旗 (ユニオン・ジャック) は、イングランド・スコットランド・アイルランドの関係を話す導入に使えるだろう。

私は、国連旗、旧南アフリカ共和国国旗、旧ソ連国旗、チベット旗、クルド旗を「社会科・公民科教育法」の授業に持参した。

国連旗のデザインのうち地球はすぐ分かる (「地理」の授業であれば、これが正距方位図法であることも確認できよう) が、それを取り囲むのがオリーブの葉であること、それが平和の象徴であることは受講生も知らないことが多いようだ。

旧ソ連国旗については、赤地 (社会主義)、槌 (労働者)、鎌 (農民)、星 (共産党の指導等) から、旧ソ連の社会主義国家としての理念 (「労働者と農民の国」等) を確認することができるだろう。

ソ連崩壊後すでに四半世紀が過ぎたのでやむを得ないことだが、旧ソ連の国旗を知らない受講生がちらほら見受けられるのは私にとって驚きだった。

旧南アフリカ共和国の国旗 (アパルトヘイト撤廃以前の国旗) は、受講生に限らず知らない人 / 覚えていない人が圧倒的だろう。この国旗は、オランダ国旗をベースに、中央に小さくイ

ギリス国旗、オレンジ自由国の国旗、トランスヴァール共和国の国旗を並べた、「国旗を見れば国の成り立ちが分かる」典型である。現在の国旗と並べれば、アパルトヘイト撤廃によって国家体制が大きく変わったことがイメージできるだろう。

チベット旗、クルド旗については、中国国内の少数民族問題や、中東の民族問題について触れるときに使えるだろう。

(7) 伏せ字本

『「表現の自由」の授業や、「日本史」で「第二次世界大戦前の日本には検閲という制度があり、伏せ字や発禁処分があった」という話をしますよね？

では、皆さんのなかで、実際に伏せ字のある本を見たことある人？』

と問うとまずいない。そこで、伏せ字のある本を見せる。

私が見せるのは、北一輝『日本改造法案大綱』（改造社）。この本の「伏せ字度」はすごく、たとえば「巻の一 國民の天皇」では、冒頭から

「（三行削除）

註一。（十一行削除） 註二。（八行削除） 註三。（五行削除） 註四。（七行削除）

天皇ノ原義。天皇ハ國民ノ總代表タリ、國家ノ根柱タルノ原理主義ヲ明カニス。

（四行削除） （二行削除） （三行削除）」

とあって、最初の4ページ弱のほとんどがカットされているのだ。

しかも、面白いことに、私が持っている数冊を比べても、発行年によって伏せ字あるいは「削除」の部分が異なっている。検閲の基準や運用が動いていたことが窺える。

また、削除された箇所を（おそらく削除されなかった版を読んだのだろう）手書きで補っている本もあり、表現の自由の制約に当時の人々がどう抵抗していたのかも感じ取ることができる。

(8) 切手

切手も実物教材としては定番である。

私が今年度見せたのは、差別撤廃のために闘った人物を描いたアメリカ切手2種類。ひとつはローザ＝パークス、ひとつはハーヴェイ＝ミルクが描かれている。

ローザ＝パークスは、モンゴメリー・バス・ボイコット事件の発端を作った公民権運動のリーダーの1人である女性。

ハーヴェイ＝ミルクは、1977年にゲイ（男性同性愛者）であることをカミングアウトしながらサンフランシスコ市の市議員に選出されたが、その後射殺されたゲイの活動家である。

こういうマイノリティの活動家を切手に描くことで讀えるところに理想主義的なアメリカを感じ取ることができるだろう。

(9) 刑事司法手続関係

「人身の自由」に関連して、犯罪の発生から判決までのプロセスを説明する時に使えるような教材をいくつか紹介する。

ひとつは私自身の似顔絵と、私の指紋を保存したカード。

『これは私の似顔絵です。似てるでしょう？ これを描いてくれた人が変わっているんです』
ともったいをつけながら見せる。

『描いてくれたのは警察官なんですよ。でもその警察官は描きながら「私は、こうやって目の前の人の似顔絵を描くのは慣れてないんですよ」と言っていました。なぜだと思いますか？
普段は、自分が見ていない人の似顔絵を描くのが仕事だそうです。

犯罪が起きますと、被害者や目撃者の証言を元に加害者や疑わしい人の似顔絵を描いて、捜査に役立てようとするじゃない。あの絵を描く警察官なんだそうです。

「この顔にピンときたら 110 番」ですよ。

以前、京橋にある警視庁の博物館で催し物をやっていて、そこで描いてもらいました。

この時には、「自分の指紋を採取してみよう」というようなコーナーもあって、これはその時に取った私の指紋』

と指紋カードも見せる。

「人身の自由」に関わって刑事司法手続を扱う場合は、逮捕等強制捜査の話がメインになるが、実際の犯罪捜査では逮捕に至るまでの任意捜査の部分が 7～8 割を占めるという話をする。

刑事司法手続に関連して、絶対に触れておきたいのは冤罪である。

冤罪については免田栄氏のサインの入った色紙を見せる。

『冤罪は分かりますよね。無実なのに有罪とされ罰を受けたりすることです。あつてはならないことですね。

日本では「死刑台からの生還」と言われる、いったん死刑判決が確定した後に再審で無罪になった事件が今までに 4 つあります。島田事件、財田川事件、松山事件、そして免田事件。

これは免田事件の犯人とされた免田栄さんの言葉とサインが記された色紙です。

「真実は神の如し」と書いてあります。免田さんは、いつ死刑が執行されるか分からないという苛酷な獄中生活の中で、キリスト教に入信するんですね。それだから、「神」という言葉が出てきたのかもしれませんが。

昔、免田さんを描いた映画が製作されて、この色紙はその上映会場で手に入れました。』

時間があれば、免田氏の著作等を用いて、死刑囚の置かれる過酷な実態も紹介したい。

(10)興信所（探偵事務所）のチラシ

自宅の郵便受けに興信所（探偵事務所）の宣伝チラシが入っていたので授業に持ち込む。

『このチラシを教材にするとしたらどう使えそう？』

まず教育内容があって、それにあったモノを用意するのが教材研究としては順当だが、授業づくりの力を高めるためには、逆にモノから教育内容を構想するというトレーニングもするとよい。メニューが先にあって食材を揃えるのではなく、冷蔵庫にある食材を使ったメニューを考えるのである。

「職業選択の自由？」「プライバシーの権利」

『そうですね。そういうことにも使える。でも私が考えたのはちょっと違う。

こういう興信所って、いったいどんな仕事をしているか知ってますか？』

「浮気調査」「取引先の会社の信用調査」「人探し」

『そうそう。あと行方不明の犬を探すとか。

それでは、探偵と聞いて皆さんが最初に思い浮かべるのは誰？ シャーロック＝ホームズとかじゃない？ 小説ではあるけれど。彼はいったい何をしている？ 殺人とか盗難とかの現場に行つて、虫眼鏡持って証拠探したり、犯人を尾行したりしますよね。

これって変じゃないですか？ どういう資格で警察官みたいな仕事を彼はしているの？ 逆に日本の私立探偵はホームズのような仕事をしてないですよ。なぜだと思う？』

ここから、日本の刑事司法制度は起訴独占主義をとっていること、国家機関である検察官が刑事事件の起訴をする権限を独占しており、普通の市民は「誰それを殺人罪で罰してくれ」というような裁判を起こせないこと、一方、ホームズの時代のイギリスでは私人による訴追が可能だったこと（現在もその制度の一部は残っているらしい）、それゆえホームズの活動は、当時のイギリスではリアリティがあったことなどを話す。

『じゃあ、金田一少年や名探偵コナンはどうなんでしょうね？ たぶん何か特別な資格を付与されていることになっているんじゃないかな。』

(11)その他

2016 年度には上記の他、次のモノを紹介した。

ロゼッタ・ストーンの記事が印刷されたハンカチ（ミュージアム・グッズ）／アメリカのアンソニー 1 ドル硬貨（女性参政権運動で活躍したスザン＝アンソニーの肖像が描かれている）／レインボーカラーの腕輪（レインボーカラーは LGBT のシンボルである）／ハーケンクロイツ旗（ドイツの「憲法忠誠」「闘う民主主義」の授業で使える）／パレスチナ伝統の刺繍が縫い取られたポシェット（現地の女性が作ったもの）／中華人民共和国五十周年を記念した切手シート（中国国内 56 の民族の、民族衣装を着た男女をそれぞれ切手 1 枚に描いている）／中国の人

権弾圧に抗議するTシャツ（北京五輪前に作られていて、五輪の輪が手錠になっている図柄が描かれている）／米大統領選でのトランプ陣営用の帽子／日本の選挙用の「必勝うちわ」／『ビッグ・イシュー』（貧困に関わる授業で使う）／アイヌ刺繍の入ったマタンプシ（はちまき）（アイヌ文化振興法の話で使う）／明治日本の産業革命遺産の切手シート